

## 目指すもの

月に一度僕の家到手紙が届きます。たどたどしい字で兄の名前と僕の名前が書いてあるその手紙の送り主は、祖母の妹、僕たち兄弟にとっては大叔母に当たる人です。僕たちと大叔母の手紙のやり取りは四年ほど前から続いています。それまでは月に一回ほど、施設に住む大叔母に会いに行っていました。日本中の、世界中の人達が会いたい人に会えない我慢の日々を強いられた時から、せめて手紙のやり取りだけでもと始まったのがきっかけです。

他愛のない内容だけどデジタルの画面を見慣れている自分達にはポストカードや切手を買うこと自体とても新鮮でした。

大叔母は「今」は障がい者です。生まれて来た時には何の障がいもありませんでした。

けれど三才くらいの時、高熱を出したそうです。なかなか熱が下がらず状況は悪化する一方だったので曾祖父母はありとあらゆる病院を駆け回ったそうです。しかし、時すでに遅し。その高熱がきっかけで障がいを持つようになってしまったそうです。それからかなりの年月が経ち今に至っています。

でも大叔母の時間は三才の時と同じまま止まっています。

僕が大叔母の存在を知るきっかけは、小学校に入学した頃でした。大叔母と食事に行ったり、映画を観たり、夏祭りの花火を家で見たこともありました。大叔母はいつも楽しそうにニコニコしていました。一時は母が祖母から「無理に付き合わせて申し訳ない。」と言われた事もあったそうですが正直僕には良くわかりませんでした。僕はただただ皆で楽しい時間を過ごしている、そんな感覚だったと思います。今も思い出すのは大叔母の楽しそうな嬉しそうな笑顔です。当時の思いを改めて母に聞いたところ母の教えは「障がいをもつ人、そうでない人、という一辺倒の考えをもたないで欲しい。世の中には様々な人達がそれぞれの場所で懸命に生きている。自分が見ている世界だけでなく広い視野をもって表も裏も知ってほしい。」というものでした。

確かに世の中は白とか黒とかはっきり決められるものばかりではありません。色々な側面があって、様々な要素が複雑に絡み合っているので絶対にこれが正しいなんて判断は誰にもできないはずで。

僕を含め僕の周りにいる人達も今は健康です。でもいつ障がい者になるかも分かりません。そして皆平等に年を取ります。段々と体力が衰え車イスが必要になったり、手足が思うように動かなくなってしまうこともあるかもしれません。

そうなった時には障がいのある無いに関わらず、確実に誰かの支えや助けが必要になるでしょう。

近年、駅や商業施設など様々な場所でユニバーサルデザインやヘルプマークを目にすることも多くなりました。しかし、それらを取り巻く僕たちの意識レベルはまだ高いものとは言えません。車イスで出かけられる場所が増えても最後に必要となるのは人の手と心だと思います。でも、難しい事はわかりません。きれいな事を言うつもりもありません。

正直に言えば、本当の僕はあまり細かいことには気をくばれないし、要領もよくありません。けれど、いざという時迷いなく手を差し伸べられる、そんな人になりたいと思っています。心が変われば人が変わる、人に変化が生まれれば、周囲の環境が変わる、そんな変化が自分の周りから広がって本当の意味でのバリアフリーがハード「形ある要素」とソフト「一人一人の意識」の両面から整っていけばいいと願っています。

そして障がいを持つ人、そうでない人という区分をなくせるよう心のバリアフリーを目指していきたいです。